



## 塾

長から落語教室を指導してほしいと言われたとき、真つ先に何を思ったか白状すると、そんな子おーわけないがや(いるわけないって)、だった。算数を伸ばすためには国語の力が必要、落語はそれに有効、という塾長の理念には共鳴するものの、それは高尾小で十年続けてきた者の実感なのだ。みんなで落語活動するような学校は他にないのだから、先の理念を訴えたところで、は？で終わりだろう。

そこでぼくはまず、落語教室は無料としてはどうか、と提案をした。塾長は、それでは体のいい託児所だ、と言下に却下する。ならば、算数教室に申し込んだ上に希望する子どもへのおまけとしてはどうか、と食い下がってみたが塾長は半ばあきれて、この落語教育モデルは全国で評価されたのだ、応分の対価をいただくのは当たり前だ、と言う。

ここまで言われて、さすがに鈍い頭にもようやく血が巡った。塾長は安売りを戒めたのだ。自分で始めておきながらどこかで、算数は上位で落語はそれより下と思っており、いつの間にか卑屈が身についてしまっていたのだ。

塾長の言うとおり、算数と格差をつける必要などない。算数でつける力と落語でつける力とどちらも子どもを確実に伸ばすと確信しているからこの塾を開くの

だ。ただ、ちよつと自己弁護をさせてもらうと、落語家、というのは卑屈を粗末にしない芸である。落語家は、自分を愚かに見せる努力をするし、「ばかばかしい」とか「何の役にも立たない」ことをむしろ誇る。落語の登場人物はどれも自分の卑屈なところを隠そうとはしない。だから落としてみせることが礼儀のように作用する。卑屈の内面化には気をつけなさいといけないのだが、この卑屈の尊重が子どもの心の成長に役立つとぼくは考えている。今のところ状況証拠しかないのだが、子どもたちがマクラで自分の恥を話したり、登場人物の愚かさに感情移入していくのに反比例して、臆する気持ちが減っていくというのを、ぼくほどの子にも見てきた。恥を話して笑われるなんてそんな恐ろしいことできない、というのが一般的な感覚だと思うが、落語はあえてそれを狙う。狙い通りお客さんが笑ってくれたらこちらもうれしいという逆説で成り立っている。繰り返し返すうちにみんなできるようになる。そして精神的にたくましくなる。

ただで教えますなどと卑屈になってしまったことはほんとうに情けないが、実は卑屈をひっくり返す教室である。そんな思いがそう簡単に伝わるはずもなく、希望する子どもはやっぱりいいないかもしれないが、ずーっと待つ、というのも悪くはなさそう。

空き家 9

## 木幡智恵美

生家①

私が生まれた家、現在全く使っていないというわけではない。週一、二回、畑に行く際、家を開けている。作業着に着替え、鉈やらスコップやら玄関の下駄箱付近に置いてある物を持って行き、用が済んだら元のところに戻す。

一昨年、庭のプレハブを壊した。以前工場があったところに物置として建てていたのだが、腐食して床が抜け、天井板も穴が空いて雨が入るようになった。海に近いため、金気のものはずぐに錆びてしまう。三十年も経てば、プレハブ全体に錆が回ってしまうのだ。

そのプレハブには、農作業に使う道具や肥料などのほか、古本、昔描いた油絵など、入れたまま目の見えない物も入っていた。撤去する前に、農作業に使うものは畑の脇に夫が作った小屋や家の玄関に置き、肥料は玄関脇に置いた蓋つきボックスに入れた。そして残ったものは、雨がしみ込み斑入りになった座布団なども、プレハブもろとも処分するよう業者に頼んだ。いずれこの家のことも考えねばならず、できることから整理しようと思ったのだ。

人の住まない家は、気が付かないうちに傷んでいる。これも三十年以上前のこと。酷く冷え込んだ冬に水道管が破裂し、一部屋の畳が水浸しになっていたことがあった。住む家なら新しい畳に替えるところだが、いつもは居ないのに新調することはないだろうと、畳を干すだけにし、そのままにしておいた。今でも、その部屋を通ると、畳が凸凹している。

台所の横の廊下は天井板が抜けている。雨漏りのせいだ。十数年前、屋根瓦を総替えしたので雨漏りはしなくなった。でも、天井はそのままだ。

数年前は、台所で弁当を食べていると、雨が吹き込んで来た。壁が崩れていたのだ。さすがにそこはそのままにしておけないので、従兄の知り合いの工務店に頼んで直してもらった。ついでに、隣の家の壁に面した用をなさない出窓も壁にした。

二、三年前にはトイレのドアが壊れ、外したままにしている。先日、孫たちを連れて梅採りに行き、出雲の家で弁当を食べた。その後、梅の処理をしていると、実歩が「何か匂う」と言い出し、寛大も「くさっ」。ポットン便所なので、暑くなると臭気が家中に漂うのだ。

30代フリーター 長野県中野市で女性2人と警察官2人がナイフや銃で殺害された事件で、31歳の容疑者の男は自宅に立てこもった際、説得の電話をかけてきた両親に「ある女性が自分をのしつていてと思い、刃物で刺し殺した」「駆けつけた警察官に撃たれると思ったので、撃たれる前に猟銃を放った」と話していたことがわかった、と報じられている（5月28日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 「妄想」ではないかと思わせるような彼の話に、私の精神分析的な「妄想」をかぶせて言えば、「ある女性」は子をとがめる母を、「駆けつけた警察官」は母に甘えるのを禁じる父を象徴しているように思える。

30代 そっちへ飛ぶのか。  
年金 フロイトによれば、3〜6歳の男児は母と性的に交わることを望み、それを阻む父に殺意を抱く。しかし、「そんなことをすればペニスを切り落とす」と父に脅され、やがてあきらめる。そして、自分も父と同じような大人になっ

て、母に代わる女性との出会いを待とうと思うようになる。この神話的な過程をフロイトはエディプスコンプレックスと名づけ、自説の中心に置いた。

容疑者の言葉に隠された無意識を彼の説にしたがって推定すると「母に近親相姦に感じるように頼んだが、ダメだと叱られたので、ペニスの代わりにナイフで刺した」「そこへ父がやってきて、そのペニスを切り落とそうとしたので、より強力なペニスである銃で対抗した」ということになる。彼はエディプスコンプレックスの着地点、すなわち父を殺して母と交わることをあきらめ、父と同じ大人になる決意をする段階に到達できないまま成人し、父殺しと母子相姦の願望を犯罪によって満たそうとしたと考えることができる。

30代 ジイさんのほうの「妄想」はど  
以上は素人の「妄想」として一笑に付されるだろうが、容疑者は鑑定留置され、話が「妄想」かどうかも含めて分析され、責任能力の有無が判定されるだろう。

買いい、自宅に配達してもらった。職人肌のいくぶんかマツチョな庄を感じさせる中年の男性が、若い男子を助手に機器の設定を始めた。電源のコードがテレビの設置場所からコンセントまで届かず、彼はひと言「短いな」と言った。私はそれを聞いてとっさに、家にあつたテールランプを渡した。

こから出てきたんだ。

年金 以前に怒りや恐れや憎しみを抱いたことのあるふたりの人物のことをふいに思い出し、そのふたりが自分の母と父の像と重なって感じられたのがきっかけだ。

私は幼いころ母にとても甘えていた。母はそれにこたえて甘やかしてくれたが、ときに私の粗相をとがめることがあつた。私はそのたびに泣いた。一方、父は厳格で、私が母に甘えているのをとらえて怒ることがあつた。

1年ほど前、私が理事長を務めていたマンション管理組合の理事会の席で、私は事実に対することを口にしたことがある。知ったかぶりをして、確かめないまま推測でものを言った。すると、理事のひとりの女性がすかさず、片手を左右に大きく振って「違う、違う」の動作をした。私にはそれが予想外の衝撃だった。とてもクレバーな女性で、自分の及びがたい相手から「ダメダメ」と叱責を受けているような気がした。

あとで振り返ると、そのときの私は、腕つぶしも気も強そうな彼のひと言を自分への命令のように受け取ったのだと思う。思い出すたびに、自分力のある者のご機嫌を取ろうとしたと情けなくなり、痛みを抑えられなかった。

その痛みから逃れようと、なぜそうしたのか理由を考えた。厳格で怖かった父と幼くて無力だった自分との関係を、人生の終盤になっても反復しているのだと思い至り、いくぶんか楽になった。この関係は自分ではどうすることもできなかつたことであり、私が責任を負えることではないからだと思う。

もともとその男性との関係はテレビの配達を依頼した側と依頼された側の関係であり、力の強さをくらべなければならぬ関係ではなかつたはずだ。それを反射的といつていいほどすくさま力関係としてとらえてしまったのは、幼児期の父との関係なしには考えられない。

会議のあと、私はその女性に「間違いを正していただいてありがとうございました」とお礼を言ったが、内心は喉にトゲが刺さったまま抜けないような気分だった。いま振り返ると、及びがたい相手であることが、幼い自分にとつての母を連想させ、その母にとがめられたような気分になっていたのだと思う。会議後の「お礼」は幼い日の「母ちゃん、ごめん」の形を変えた反復だったのかもしれない。

このときの経験はこの2月に理事長を退任してからは、あまり思い出さなくなつた。それが先日いきなり痛みとともによみがえつた。私の退いた今の理事会の議事録がエレベーターホールに掲示されているのを見たのがきっかけだった。トラウマはそれを負つてから時間がたったあと、何かの出来事に刺激されて症状化し、痛み出すという精神分析の知見そのままの経過をたどっているように思えた。

30代 で、もうひとりの人物は？  
年金 2カ月余り前、新しいテレビを

ニュース日記 879  
中村 礼治

母よ、父よ